慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中村義知著『現代の政治』：その論理と構造
Sub Title	Yoshitomo Nakamura, Contemporary politics : its logic and structure
Author	内山, 秀夫(Uchiyama, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1971
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.44, No.11 (1971. 11) ,p.123- 129
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19711115-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

中村　義知著

『現代の政治』

――その論理と構造――

行動論革命といい行動論以後の革命といい、そうした状況は確実に〈歴史としての現代〉の人間情況を認識する視座の模索と突きとめ、およびその転移をいうにほかならない。それはまた、現代人の営為がすべて政治に収斂せざるをえないという意味で〈政治化の時代〉に顔つきあわせるべき政治研究者の自己対象化・客観化が要請されることをも意味している。

かくして、政治研究者にとつて、政治とはつねに研究者の〈内心〉の問題でもあるし、その内心が研究者の方法論を規定するはずである。したがつて、このコンテキストによるならば、〈政治〉研究を意思するかぎり、自己の専門領域の確定とこの〈内心〉ないし方法論との連関をさけるわけにはいかない。

この情況は、なにもD・イーストンの啓蒙をもちだすまでもなく、デモクラシーへの〈冬の旅〉を続けているわれわれには当然のことである。それにもかかわらず、われわれが学問というこの誘惑にみちた旅路をたどるかぎり、人間の営為としての政治をトータルに認識しなければならない責務から逃避し、〈内心〉を欠落させたままで研究者たることを自認する専門性の陥穽におちこむ。

そこには、前述したすべてが政治にいやおうなく収斂する現代を生きる意思の欠如があるはずである。さらには、歴史的に不確定な現代を、研究者であるがために確定しなければならぬ責務からの堕落がある。

そうした自己の堕落を知つた時、すなわちどうしても必然とはいえない専門領域に自分をかまけた時、他者の内心を見ることで、堕落からはいあがり、堕弱をこそぎおとす作業が必要になる。政治研究者にとつて、政治理論への〈回心〉こそそうした作業にほかならない。その私の〈回心〉のプロセスでくわした他者に中村義知教授がおられ、本書があつた。

※

「政治は人間がしんにその個性を発揮し、人間が人間らしく生きていくための環境を整備し、人間が各自の幸福を追求するのに有利な条件を整えることを目的とすべきものである。それゆえ、しょせん、政治は政治であつて、それ以上のものであるべきではない。この世には政治以上に追求すべきもろもろの価値があるのであつて、これらの価値のためにこそ人間は生きるのである。それゆえに、政治の究極の目標は、人間の人間らしい価値追求を助けることにあらねばならない。しかるに、現実の政治は、これらの価値を圧倒して暴走することがしばしばである。それはいつたいなぜであるか。政治のこの暴走を抑えて、政治をして、その慎ましい目的に限定させ

るにはどうしたらよいであろうか。」（一頁。傍点＝内山）

ここで著者が包懐している「政治」は判然としないが、おそらく手段としての政治であろうし、手段として合目的的な政治であり、その意味で一つの価値と見さだめられている。しかも、現代の政治が人間の手段ではなく、あたかも政治が人間から離脱して、独立したダイナミズムを展開し、それに人間がとりこまれている転倒状況が認識され、人間による政治の奪回こそ現代人の作為でなければならないと主張されている。だから「本書は、むしろ、市民がそうした現実政治を科学的に分析し把握するために必要な一般理論や観念の研究と分析とに重点をおいている」（一頁）ことには、政治主体としての人間（＝市民）の「意味」がこめられる。

著者のこの「意味」探究の方法を明らかにするのは次の文節である。「本論においては、一方では、著者が従来包懐していた政治二重機能論をM・デュヴェルジェの示唆にしたがつて、より明確に仕上げつつこれを経糸として全編を二編に分ち、他方で、同じく著者がかねてから唱えていた分業一元論を社会の分節構造論として徹底させつつ、これを緯糸として配した。その上で本書は、現代政治および政治学の当面する諸問題を経糸にしたがつて展開しつつ、これを緯糸によつて固定していつた。」（二頁）この発展と固定のあとをたどることにしよう。

※　※

著者の論脈の経をなす政治学の二元構造論とは、「単純構造的政治学」をもつて従来の政治学論を構成する作業によつて意味をあたえられる。しばらく著者に語らせよう。

前者（著者がいう実証的政治社会学＝内山）が価値自由的であり、後者（著者がいう普遍的価値貫徹的政治学＝内山）が価値貫徹的である点で、相互にまつたく対立的な性格のものということもできるが、他方で、前者が価値自由の点で一貫していることにおいて単純な構成をとつており、また後者が価値貫徹の点で一貫した単純な構成をとつているという、構造的単純性の点で、両者はまつたく共通な性格をもつているといえるのである。それゆえ、ここでは、この両者の学的構成の単純性に着目して、その内容の相違にもかかわらず、これを一括して単純構造的政治学とよぶことにする。（二三頁。傍点＝内山）

この単純構造的政治学は、「従来、政治学の発達は哲学より科学への発達として比較的簡単に考えられ、しかも、それは単純構造的であり、かつ、価値自由な政治学と普遍的価値貫徹的政治科学とは究極的に一致する」（三頁）と指定されていた点で論理的破綻を内蔵していなかつた。それにたいして、政治学のあり方にたいしてひとつの問題を提起したのが「二重構造的政治学」である。著者をして語らしめれば、それは次のごとくである。

価値自由で、経験的・実証的な政治社会学と価値貫徹的政治哲学

との区別を前提としつつ、現実の政治学は、両者の緊張的で暫定的な結合として存在する……。（二二頁）

政治社会学も政治哲学も、ある意味で相互に寄生しつつ活動している。政治の社会学と哲学とは相互に分離しがたいばかりでなく、特別な意味合いにおいて、双方とも無限に自己展開するものである。断言的で決定的な哲学はけつして現われないであろうし、また、決定的で断言的な社会学も出現しないだろう。社会学は、自己の知識がそこから構築される歴史の一部分であり、知識は日に日に改定されたり廃棄されたりする。このことが政治研究にもたらす帰結は、必然的に、それが暫定的な性格をもたざるをえないということである。（一九頁）

この問題提起は「従来、われわれは、政治学の発展を単純に、哲学から科学への発展と解し、単純構造的政治学こそ政治学のあるべき姿だとする傾向を暗黙のうちにいだいていた。しかも、そのさい、価値貫徹政治学はマンハイムのいわゆる相関主義のディレンマに陥り、他方で、実証的政治社会学は政治哲学の密輸入という難問に逢着していたにもかかわらず、あえて、これらのアポリアの解決に手を下しかねていた」（一七頁）状況に対峙したランシマンの姿勢を中村教授が共有したことを示している。ランシマンの対応は『現代の政治学』（川上源太郎訳、竹内書店）に明らかだから（本書、一五―七頁参照）、ここではとくにとりあげることはしないが、著者がランシマンを批判的にふまえた限りで、その論旨を展開している以上、著者の「批判」は聴いておかねばならない。

第一に著者があげる問題点は、ランシマンが「政治学の一構成要素たる政治哲学において、その諸潮流の対立・分裂を究極的に否定して、自然科学の諸規範にたいする信念の出発点と同様に考えられる政治哲学的信念の共有体が存在すると考えていることである。」（一八頁）政治哲学が人間の嗜好の問題であるとすれば、政治哲学は雲散霧消してしまうが、まじめにそれをとりあげる限り、政治哲学はいくつかの承認された諸前提に拠るにちがいない。その上での政治諸哲学の対立は確かに「対立」として存続するだろうが、その解決努力が「政治哲学へのアピールばかりでなく、その社会学へのアピール」をもふくんでいる以上、「対立」の決着を不可能とする必要はない。すなわち、ヴェーバーのいう「神々の争い」は、前述した「政治哲学の前提が不完全な形でしか規定されていないということと、さらに、それが結びついている政治社会学に関しては、社会学的一般化のもつ暫定的一般化」（一九頁。傍点＝内山）によつて、政治哲学における変心が考えられ、この「争い」の絶対性は緩和される。

第二の問題点は、「信念の源泉は、論理的には、信念の妥当性とはなんら関係がない」（一九頁）とするランシマンの論点に関連している。中村教授は明晰に次のように指摘する。「二重構造的政治学を主張しつつ、他方で、信念の源泉は論理的には信念の妥当性とはなんら関係がないとする定言的命題を樹立しうるためには、かれがいうように、政治哲学的信念の共有体という命題がなければならな

いであろう。しかし、この命題をまさに私は否認したのである。それゆえに、私は、信念の源泉は論理的には信念の妥当性とはなんら関係がないという命題をも否認する。そして、そのかわりに、私は、社会的信念は論理的妥当性と社会的妥当性との二重の妥当性を有しなくてはならないと考えるのである。」（一九頁。傍点＝内山）

第三は、政治哲学と政治社会学の分離と結合が、ランシマンのいうようには簡単にはゆかないのではないか、という問題である。

「諸政治哲学は、それぞれその社会的源泉と結びついて、つねに対立的に存在する。そして、政治哲学の源泉としての社会構造の諸部分はつねに変化している。それゆえ、さまざまの政治哲学がたえず対立的に存在しているとき、科学としての政治学はいかなる政治哲学と政治社会学との結合であるかが問題となる。」（二〇頁）

この問題認識は結局、イデオロギーの科学的価値の問題につながらざるをえない。著者が「科学的思惟にたいする作用という観点に立つとき、さまざまなイデオロギーは同一平面にあるものではないのであつて、ある価値判断は他の価値判断よりも現実のいつそう大きな理解を可能にする。……対立する二つの社会観のうち、どちらがより大きな科学的価値をもつかは、二つのうちどちらが、他方を社会的人間的現象として理解することを可能にするか、その下部構造を取出すことを可能にするか、そして内在的批判によつてその矛盾と限界を明らかにすることができるか、ということによつて決せられる」（二一頁）という時、科学と価値の問題がぎりぎり迫つてきている現代の様相がきわだつて明らかにされる。

かくして中村教授は、現代政治学像を明確に次のように指摘する。

現代政治学は、一方で、人類のすべての社会、階層および世代を俯瞰しうる高所に立つ最高の政治哲学を探究しなければならない。他方で、それは、近来、急激な発展をみせつつある隣接社会諸科学の諸命題をことごとく探究し、この政治哲学のもとに包摂しなければならない。現代政治学の構造をこのようにとらえることによつて、それは非閉鎖的で無限に発展可能な学問体系としての可能性を保証されたのである。（二一頁）

※　※　※

こうした問題意識と構想によつて、本書は「抗争としての政治」を第一編として、「統合としての政治」を第二編として設定される。「抗争としての政治」は、政治過程として措定された分野の内容を規定する表題であるが、著者がいうように、ベントリー、キー、トルーマンを礎定者とするそれは政治集団に偏倚しすぎて、個人と公衆の問題を看過しているとシャットシュナイダーが批判したにもかかわらず、「いわゆる政治過程論のワクを破つて政治変動過程をも包摂する徹底した分析視角をあたえるものである」点で重要性を維持している状況を見てとるべきである。

政治抗争を認識手がかりにするために、著者は政治社会の分節的構造の概念を一貫する。この概念はE・レーデラーが『大衆の国家』

の中で提示した一単位社会の集団的構成にかんするものであるが、著者によつて「社会にさまざまの分節体が存在しているのは、社会のなかで人びとのさまざまな利害や観点が分化することが避けられないという否定できない事実の結果であり、かつ原因である」とする指摘をへて、次の認識にまでいたる。

私は、この分節構造の観念を科学的に仕上げ、かつ、それを人類社会の全側面に適用することが政治学の発展と体系化のうえできわめて重要であると考える。たとえば、人類社会は、統一的社会ではなく、多数の単位政治社会に分化しており、さらに、各単位社会はその内部に経済的分節を有しており、さらに政治制度的分節や政治運営上の分節性など、人類の政治生活のあらゆる面で分節構造は重要な意義をもつている。むろん、この分節性を全面的に破壊して強制的同質化を実現せんとする全体主義（絶対主義）の運動もあるが、このような運動の意義も、また、この分節性の観念から興味ある分析と評価が可能となることはレーデラーやノイマンがしめすところである。（二九―三〇頁）

この社会的分節は「政治抗争の原因であるとともに、社会発展の動因でもある」（二八頁）のだが、基本的には社会的分業をもつて社会的分節とする点で著者は視線をさし透そうとする。その結果、第一編の主題は、階層と階級、民族をめぐつて旋転し（第一章）、政治集団（政党、圧力団体。第二章）に論及し、公衆（第三章）にいたる。第一および第二章はその論旨展開および項目を別とすれば特記すべきことはない。しかし、第三章の場合には、「いまや、エリート――公衆――大衆という、古典的自由主義的デモクラシーの三分節的社会構造は崩壊して、エリートと大衆とが直接無媒介に対峙するという二分節的社会構造が出現した」（一一一頁）現代の状況を確認する点で重大である。すなわち「同質の世論によつて統一された民衆であつて、安定した政治体制の支柱となりうるもの」（一〇八頁）であり、「さいごに形成されながら、民主主義文明の進展につれてもつとも発展の途につくだろう社会集団」（一一〇頁）としての公衆が幻想化し、「ある問題や利害にかんしてたまたま同じ態度をとる人びとの一時的な集合」（一一一頁）として再構成されざるをえない状況は、「大衆デモクラシー下の人間」の問題に接続しなければならなくなる。そこには「地域的共同生活が回復されないかぎり、公衆もまた回復されえない」（一一三頁）とする実践命題をふくみつつ、「巨大な生産力によつてつくりだされた大衆は形式的合理性とともに心理的非合理性という矛盾した性質をもつている。政治体制にたいする機能という点でもまつたく姿を異にする。意見のあたえ手と受け手の不均衡は決定的な形をとり、大衆は討論の相手というより操作の対象となる。……そこでは、大衆は巨大な群集に転落する可能性をますばかりである。

大衆社会ではアノミー状況が進展し、心理的不安に襲われた大衆は、しばしば政治的大衆運動のかたちで逃避する。信念体系の矛盾や混乱に襲われ、根源的不安に苦しむ人びとは指導者を求め、救世

主を求め、これと同一化する。こうして、大衆社会では不安の誤った処理としての逆行的大衆運動がしばしば発生し、群集的社会関係においては、こうした逆行性が加速化される」（一一三―一一四頁）と指摘され、この「大衆」政治を分析課題とする論脈が形成される。

第二編では、政治統合の中核としての政治権力・国家権力が明確にされている。そしてそれは「氷山のように、社会という大洋の底深く諸種の社会集団とその社会的諸権力によって支えられ、深く根を下ろしている」構図が描かれ、特定の政治体制の形態をとって実現される政治統合の様態が提示される。

政治権力の問題はいわば政治学のグレート・イッシューであるがゆえに、いまさらそれにつけ加えることは多くない。しかし、案外この第四章「政治権力」を読んでみれば、われわれがいかに政治権力にかんする学問的資産を共有していないかが明らかになるのではないか。たとえば「近代における国家と市民社会との分離は、権力の見地からみれば、公的政治権力としての国家権力と社会諸権力との分離＝二重化過程の完成を意味する。……国家権力は、政治社会の存続のために優越的権力として他の社会的権力にたいする統制を行ないつつも、他方で、所与の時代の所与の社会に客観的に必要な機能の分化を尊重して国家権力の恣意的な介入を抑制するばかりか、むしろ他の社会的諸権力に依存しつつ作用するのでなければ国家権力自身も安定的に行動しえない。この歴史的に規定された条件と限度をこえた国家権力の行動は、結局は、他の社会的諸権力の反抗に直面して、無力たらざるをえないばかりか、国家権力自身も安定を失って崩壊せざるをえない」（一三五―三六頁）といった政治権力と国家権力の歴史的メルクマールについて、どの程度認識を共有した上で、現在権力が語られているであろうか。

この私の危惧を、第五章「国家」、第六章「政治体制」、第七章「政治指導」と読み進まれた時、共有する研究者がおそらく多いことであろう。

※　※　※　※

本書は「印刷のつごうで……とくに政治過程論・官僚制・独裁的政治体制・政治変動などの章を削除」（二頁）しているために、厳しい問題提起と方法論にもかかわらず転結がはっきりしないうらみがある。しかし、それだからといって本書が致命的な欠陥をもつというわけではない。むしろ、政治学として政治を理論化する契機を研究者が内在化している以上、いつかは暫定的に（すなわち、研究者として）はたさねばならない課題を中村教授がはたそうとした、その試論をうけとるまじめな姿勢こそが重大である。

この研究者の情況こそ、権力の状況が合理化され形式化されているさなかで、権力と人間が織りなしてゆく模様を明確に指摘し、次なる人間にバトン・タッチするわれわれの責務でもあろうか。

とりわけ、隣接諸科学との交叉を大前提とすることでとりこむことのできる尨大な資料・確認量をまえにした時、それを整理集成することの難しさと、整理基準の必要を本書は明らかにしているし、また現実政治において見失われた価値観の要請のいよいよ熾烈の度

をましている状況に見あつた論理化要請も指摘されている。

われわれがD・イーストンのいう〈行動論以後の革命〉にいることは、わが国のデモクラシー定着の（おそらくは限りない）過程にあることでいうまでもないが、実はこうした意識そのものが政治学をステレオ化し、権力構造認識の形式性をもたらしてしまう。（この実例が学生であつたといえる。）その誤謬をさけるためには、ちょうど「現代政治学」の旗手たちが懸命になつている概念の推敲による新しい政治科学への意思の昂揚であり、新しい方法にたいする確実な意味づけが必要である。

当初にのべたように、専門分野に逃避することの無知は、ふりすてられるものであるよりも悪ですらある。つねにおのれを確保し、現実を現実として確認しつつ、挫折に陥没しない勇気と英智を備える試みを自己に課す、そのために本書があるのだし、精読をすすめたい。なお、政治学の二重構造論にかんしては、広島大学『政経論叢』十九巻二号（一九六九年九月）所載の「政治学の構造について」を参照するべきであり、国家論、政治過程論にかんする中村教授の構想の原型は『現代政治学研究』（広島大学政経学部政治経済研究所刊・昭和四一年）にかいまみることができることを付言しておきたい。（法律文化社刊、一九七〇年、二六三頁、九八〇円）（一九七一・八・二〇）

（内山　秀夫）

W・ガムソン著

『権力と不満』

William A. Gamson,

Power and Discontent

The Dorsey Press, Homewood, Illinois,

1968, xi＋208pp.

一　政治権力の研究は現在二重の意味で困難に直面している。そのひとつは政治権力を研究する立場の混乱である。政治権力の研究には、当為的考察と事実的分析の二つが含まれる。この二つの研究は互いに独立してなされなければならない。ところが、権力の用語は〝価値〟と深い関連を有してきている。政治学の長い系譜は、主権の最高性や政治権力の正統性についての議論であつた。このような伝統のもとでは、政治権力の事実的分析を思想的考察から解放するには意識的努力が必要である。だが、この問題はすでに言い尽くされた警告であり、今日それほど重要ではない。むしろ、重大なのは政治権力の事実的分析を行なう場合の照準にある。政治権力の分析は、政治の経験的分析の中でどこに位置づけられるのであろうか。この古めかしい発想をあえて持ち出すのは、政治権力の分析に対して過度の期待が一部に持たれてきたからである。今日、この期待はやや薄らいでいるというものの、つい最近まで権力の概念は希望の光